

## 巻頭言

### “時に対応した技術技能思考” “Consideration of Technologies and Skills matching with the Times”

執行役員  
生産本部 栗津工場長  
中谷 兼武  
K. Nakatani



DVDプレーヤー、VTR、デスクトップパソコン、カラーTV、粗鋼、二輪車、エアコンなどは、かつて日本がQ.C.Dで世界を凌駕した品目ですが、今日では中国にC.Dで世界一のシェアを奪われています。今、中国の製造業はかつて日本が“世界の工場”へと躍進していた東京オリンピック(1964年)の頃とよく似た状況にあります。ただし当時の日本は、既に造船、鉄道車両、機械などの重厚超大な工業分野においても世界の工場になっていました。当時の日本と今の中国の“物作り”における発展の差は为什么呢？

現在、中国が世界一を握った弱電を中心とした製品の多くは、日本のメーカーが開発、生産、製造の各技術、または製造技能、さらには生産設備、管理技術まで“物作りまるごと”を中国に持ち込んだ結果です。一方、中国の機械などの重工業分野は、日本および米欧メーカーから図面などの技術移転が20～30年前からされてきましたが、世界の工場には程遠いのが現状です。どうして日本の製造業との差が発生したのでしょうか？ もちろん国の施策、資金力などもあったと思われませんが、決定的な差は、日本の優秀な技術者と技能者が互いに啓蒙し、そして開発、生産、製造、管理、手法など、日本独自の技術、技能を育てたところにあったと考えます。

一時代前の日本の技能者は、新しい設備、管理方法などを次々と消化、育て、改善定着させる“考える技能者、技能集団”でした。すなわち日本独自の“考える技能者、技能集団”が標準化万能主義の米欧の技術者と工業製品を凌駕していったと思っています。このことはコマツについても同じことがいえます。しかし、現在のコマツの製造現場はいかなるものでしょうか。標準化は大変重要であるが、“考える技能者、技能集団”から黙って標準を受け入れる“考えない技能者、技能集団”になりつつあるのではないかと危惧している日々で、再び“考え創造する技能者、技能集団”に脱皮する必要があります。

では、開発、生産、技術者はどうでしょう。以前は米欧の製品、新しい設備、技術、市場にあらゆる情報源を求めて“調査、研究する技術者、技術集団”でした。それは時代がそうさせたのかも知れません。その頃、情報システムが今のように発達しておらず、自らの足で現場、現物、現実を調査確認するのが最良の方法でした。それによって得られた新しい、生の情報と知識は研究、開発心をかきたて、米欧を凌駕する技術と製品を生み出したと思っています。コマツの技術、技能集団についても全く同じことがいえ、米欧を凌駕する建機を生み出したといえます。しかし、80年代後半のコマツは、海外生産を加速し、コマツが育成した技術、技能を積極的に海外へ移転しましたが、移転そのものが技術者、技能者の重要な目的となった感がありました。すなわち“考える技能者、技能集団”から“教えてやる技能者、技能集団”に、また、“調査、研究する技術者、技術者集団”から“指導する技術者、技術集団”になったと思われる感が多々あります。

一方、日本人は幼年期から2次元の世界での思考創出、すなわち紙面上に書く、画面に写し出し、判断、そして創造する経験が飛躍的に増加しています。たとえそれが3次元画像であっても、写し出されている画面は2次元であり、2次元の思考です。立体の物を造ることからますます遠ざかっており、これがコマツの技術、技能力にどんな影響をもたらすのか見守り、対応する必要があります。

このような中で、技術者、技能者は、三現主義に則り、正しく現状を認識した上で、改善に向けて新しい思考を探求する必要があると強く考えます。今後もコマツの物作りは、技術者、技能者が“時に対応した技術、技能思考”を持ち得れば健在であると考えます。

最後に、この巻頭の言を書き、最後に三枝匡氏が述べている“創って、作って、売る”が頭に浮かび、我々開発、生産に携わる者は“創って、作って、売る、技術技能集団”になることがますます重要と考える今日です。